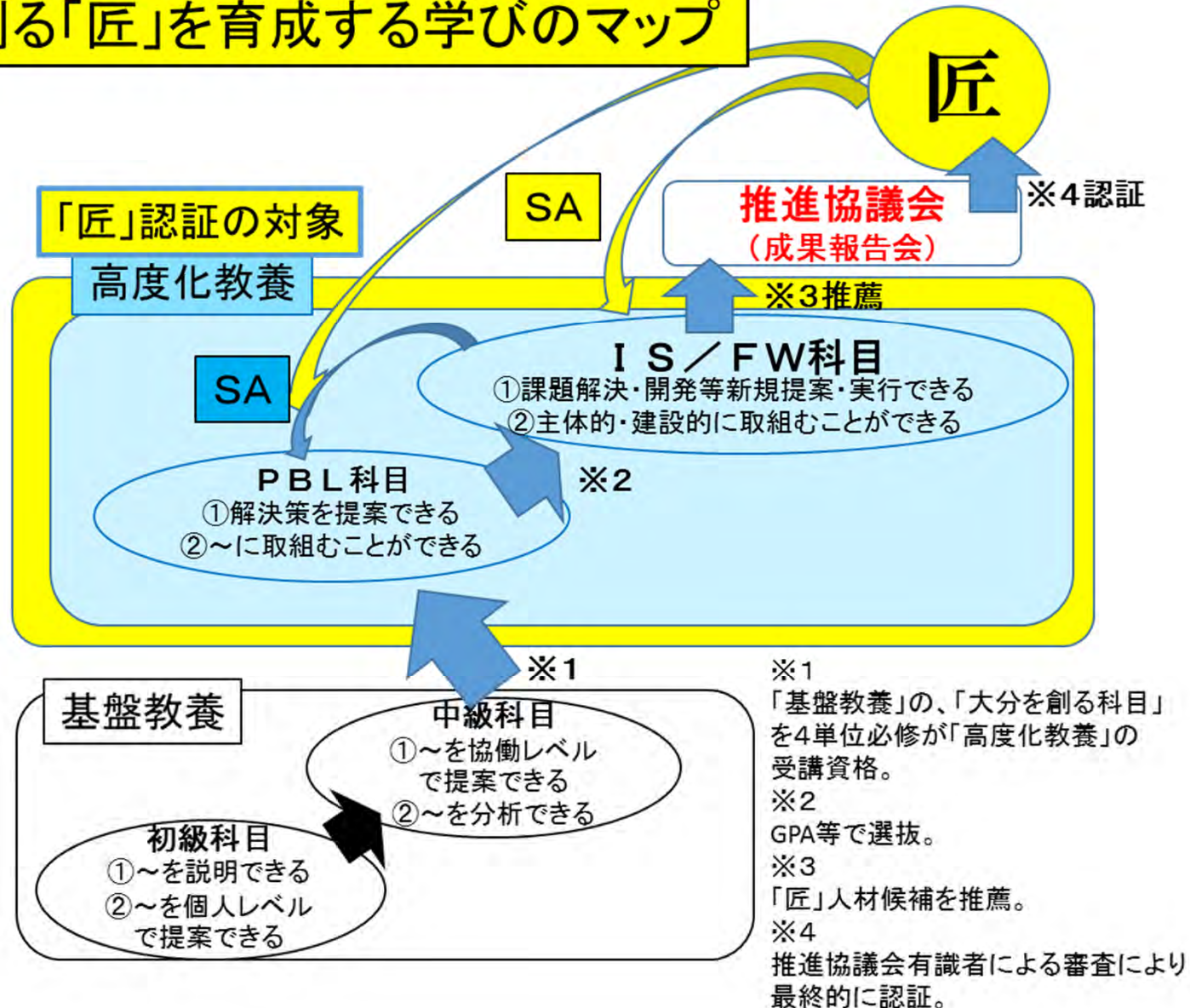


「大分を創るトッパアップ科目」（高度化教養科目）の概要

大分を創る「匠」を育成する学びのマップ



大分を創るトップアップ科目(高度化教養科目)の開講スケジュール

ステップ	単位数・科目名	教員名 (数)	受講者数	対象者	開講時期	H28年度	H29年度	H30年度	H31年度
ステップ2 (ブランディング型) 1. 企業等の活性化体験を通して自分の職業観を育てる科目群	2単位 地域ブランディング	5名/クラス 石川 他	100名 2年生後期 ~4年生	基盤教養 規程単位 履修者 4単位以上	後期	教養科目として 試行 受講生: 2, 3年生 (30人程度)	開講	開講	開講
ステップ3 (利益共有型科目①) 1. 企業の新事業を立ち上げる実体験に触れる科目群	2単位 ①利益共有型インターンシップ (企業型)	高見 他	20名 3, 4年生	ステップ1・2 の履修者	8月以降		試行 受講生: 未定	開講	開講
ステップ3 (利益共有型科目②) 2. 地域(自然、観光、歴史、文化、ものづくり)を豊く化させる実体験に触れる科目群	2単位 ①利益共有型インターンシップ (地域豊く化型)	石川 他	20名 3, 4年生	ステップ1・2 の履修者	8月~12月	教養科目として 試行 受講生: 2, 3年生 (10人程度)	教養科目として 開講 受講生: 未定	開講	開講
	2単位 ②高度化学習ボランティア 実践	岡田 他	20名 3, 4年生	ステップ1・2 の履修者	8月~12月		試行 受講生: 未定	開講	開講

1. 高度化教養科目の構成
※大分を創るステップ②・③

ステップ②. 地域ブランディング

ステップ③

- (1). 利益共有型インターンシップ(地域豊じょう型)
- (2). 利益共有型インターンシップ(企業型)
- (3). 高度化ボランティア

2. 高度化教養科目の2つの根本理念

学外課題

- ・ I. 学生の「生きる力」をのばす
- ・ II. 地域や企業に貢献する

I. 学生の「生きる力」をのばす

- ・ 価値の消費者(学生)
- ・ Closed End 答えがある課題
- ・ 教えられた仕事

現場に出向き、肌体験
の中で「考える」鍛錬

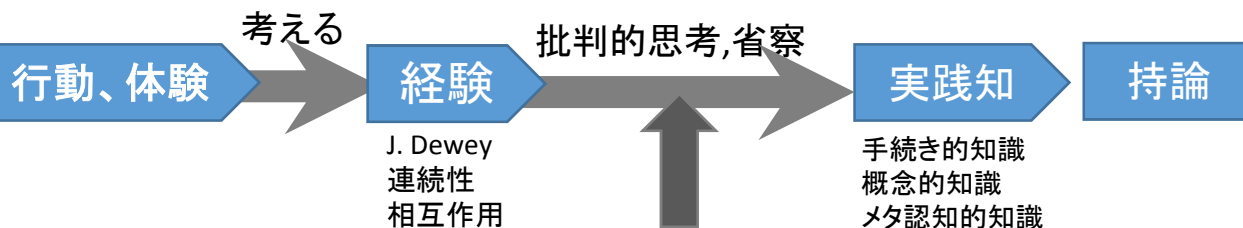
批判的思考力

- ・ 価値の創造・生産者(社会人)
- ・ Open End 決まった答えがない課題
- ・ 我が手でつくる仕事

高度化教養
(教養科目) 異質集団での鍛錬

共にアクティブ
ラーニング

卒論、修論の研究
(専門科目) 同質集団での鍛錬



情報、事実
明確化

推論の土台の検討
(根拠、証拠)

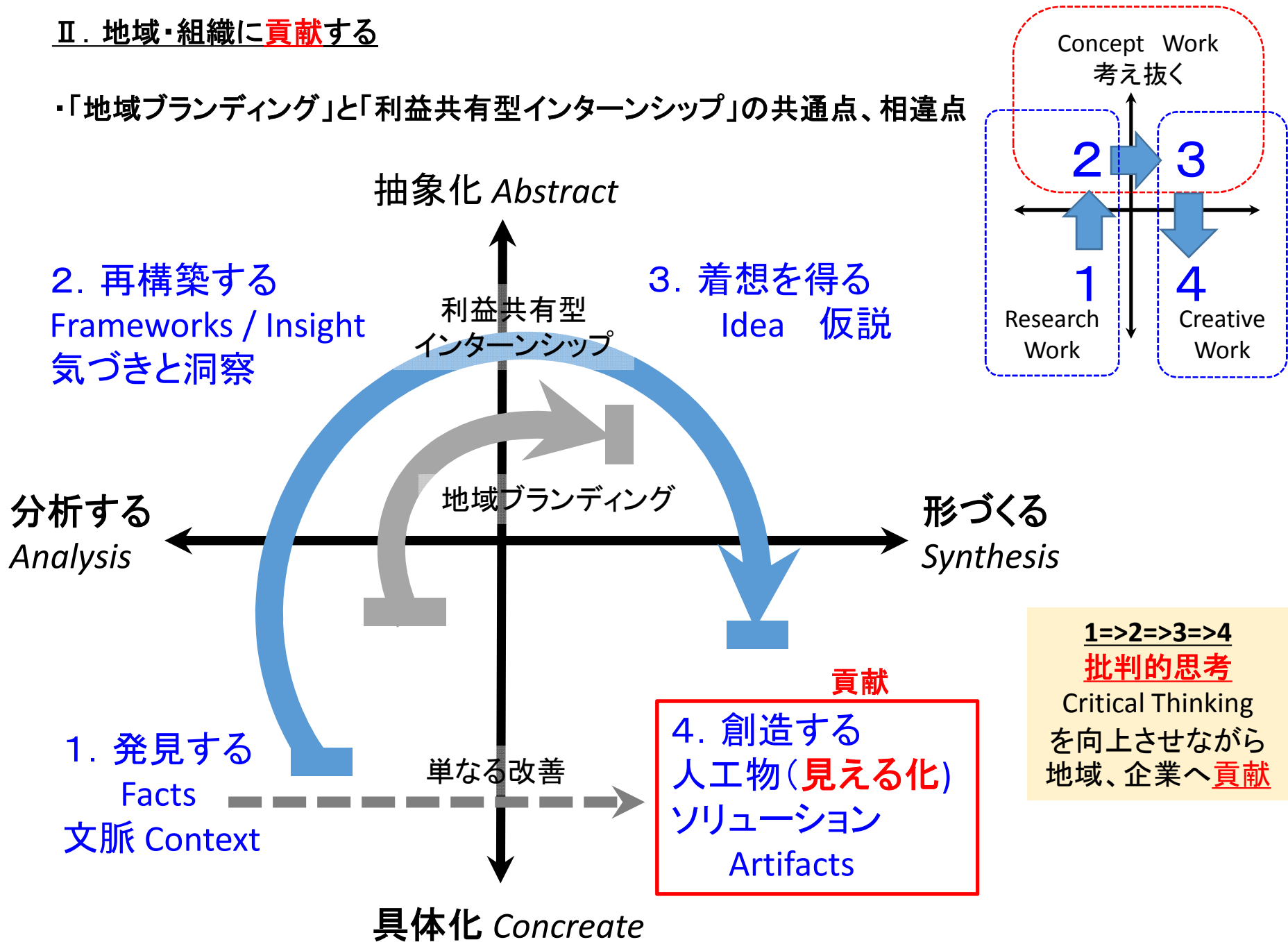
オリジナル
仮説、推論

行動決定
問題解決

批判的思考
Critical
Thinking

II. 地域・組織に貢献する

・「地域ブランディング」と「利益共有型インターンシップ」の共通点、相違点



科目名： 高度化①：地域ブランディング

1. 授業の概要

大分県内の地域自治体や企業などの地域組織から提示された課題に対して、文理混合の複数の学生がチームとして解決策や新企画案を提示する。用意された課題の全ての対象地域や組織を見学した後に、1つのテーマを選ぶ。地域や組織に触れ、必要な知識や情報は自ら調べて、仲間と話し合い、地域の方が気づいていない学生視点の意見を発案させるように意識している。その際活用する地域資源の一例を右表にまとめている。

1課題当たり4チーム(1チーム3名程度)が課題解決案をアイデア出しで協議してまとめる。それをチーム毎に中間発表で示し、課題提供者の視点から厳しく評価してもらう。この忠告などを踏まえて、1次案をジグソー学習法などでより深く練り上げ、チーム毎の競合形式での解決案の最終発表につなげる。課題提供者は講評と表彰を行う。最後に、グループワークとして本講義の受講により参加学生の個々人が、どのような対人能力、対自己力、対課題力が向上したのか振り返る。

2. ねらい

与えられた地域・企業の課題解決にグループで取り組むことにより、①学生自身の言語化能力(意味のある発言を意識的に行っているか)、②思いつきでなく根拠を示しながら新しい発想を提示する力、③傾聴し、正しく理解しながら議論を推進する力など①～③を向上させる。その結果、地域への理解が深まると同時に、地域課題の解決からグローバル課題に踏み込もうとする姿勢につながることを狙っている。課題提供者が、直ぐにでも活用できる解決策の提案が理想であるが、それを第1の到達目標とはしない。この点で、利益共有型インターシップと大きく異なる。

3. 対象学年と学部： 1～4年生、全学部（2016年度 工4、経27、教7の合計38（留学生3を含む）名の参加）

「行動・体験」「経験」時に接する地域資源

1. **文化資源** (工芸、神社、祭り、芸能、歴史など)
2. **自然資源** (特産物、山、河川、農地、寒暖差、気候、獣害)
3. **人工資源** (施設、道の駅や協働販売所、廃校、道路、自衛隊の存在、営利企業)
4. **社会資源** (公民館活動、人のネットワーク、地域の不文律ルール、地域の階層性： 集落、町内会、自治体、行政区、学校区、消防団、民政区域、NPO、社協、子供会、意思決定の立場にある高齢者と地域わかもの葛藤など)

～学生が与えられた地域・企業課題を解決する手順～

- 手順1. **提案された課題との接触**
課題提供者の話の傾聴、質問、仲間同士での内容確認
- 手順2. **現場訪問による課題との距離の短縮**
地域と企業との肌間隔での接触
- 手順3. **グループワークでのアイデア出しとストーリー化**
アクティブラーニング手法の活用
- 手順4. **グループ発表と課題提供の学外者からの厳しい評価**

4. 授業実施体制 現地訪問では、担当教員全員と支援コーディネーター2～3名が必ず随伴した。学生が怪我など被る場合と、学生が加害者になる場合の双方を想定した保険加入を確認した。提案された課題1つに対して必ず1人の教員が専属担当となり、支援のコーディネーター一人と組んで4チーム(1課題)を指導する体制とした。

5. テーマ設定 (年度により対象テーマが変わる。地域については継続しても変わっても良い)

	2016年度の具体的な内容例	学生数	担当者
テーマ 1	大分市役所 H31完成大分川ダム横に建設予定の「道の駅」、まだ新しい「未利用学校」、地域スポーツNPO組織を活用した地域振興策の提示	13人 (4班)	安部、支援 和田
テーマ 2	玖珠市役所、(株)大麦や、(有)東華 地域で栽培収穫される予定の大麦を使用した6次産品化による地域みがき策の提示	13人 (4班)	大賀、支援 梶原
テーマ 3	日田市役所、清水住設(株) 日田市内に改築予定の宿泊施設に対し、若者が集ってくるような魅力的なストーリーをもった企画の提示	12人 (4班)	石川、支援 岡野

6. 授業過程

1回2コマ連続の講義を隔週実施 導入編 1～3、 大学内で実施する課題解決策の協議、発表とその評価 4～8

- 11/9 (水) 大分大学でのオリエンテーションと地域課題の説明、ルーブリックによる社会人基礎力の自己分析
大分川ダム(大分市)、大麦の活用(玖珠市、大麦や社長、東華)、日田(日田市、清水住設)
- 11/13 (日) 1回目バスツアーで現地訪問(大分川ダム)7～8kmのダム内部の徒歩見学、地域炊き出し交流、地域スポーツNPO訪問
- 11/19 (日) 2回目バスツアーで現地訪問(玖珠、日田) 大麦を駆使した料理の昼食、日田の観光地と改装予定の宿泊施設見学
テーマ分けの実施
- 11/30 (水) 1回目のアイデア出しとその言語化まとめ。ブレインストーミングなど
- 12/7 (水) **中間発表**と課題提供者による厳しい評価実施。チーム毎に実施。不足点と再調査する点などを気付かせ、それらを次回のジグソー学習の課題とする。
- 12/21 (水) 前回の調査課題を素材にした**ジグソー学習**を各課題4チーム(3人程度/チーム)間で実施
- 1/11 (水) 企画の修正と最終提案の作成
- 1/25 (水) 最終企画提案の発表(ポスター琉球大型)、課題提供者による講評、評価と表彰
- 2/1 (水) この講義に参加して成長した点、獲得した知識などのグループワークによる振り返り実施

7. 必要経費

日帰りバスツアー2回分の経費、課題提供者の大学訪問(3回分、課題説明、中間発表、最終発表)のための交通費、ブレインストーミングで使用する模造紙、マジックペン、多量のポストイット、バス車中や現地訪問先でメモ時に使用する手板などの消耗品費

科目名：高度化②利益共有型インターンシップ(地域豊じょう型)

1. 授業の概要

大分県内の過疎高齢化地域とその地域の住民組織を連携先の対象にする。文理混合の学生が地域現場に宿泊滞在し(10日～2週間)、学生が地域住民に直接ヒアリングすることから「地域の豊かさ」と「地域のカネの回り」との関係を探る。地域資源の一例を右表にまとめている。

今年度は、画一的な経済指標とは異なる、学生が分析した「地域の豊かさ」を東京や福岡などの都市部住民に対し伝え、都市部の方が足を運んでみようと思える広報物の案を作成する。それを宿泊先の地域の方々に対して発表し、評価を受ける。

今後、同じ訪問地域に対する活動のレベルを一段階ずつ上げながら3～4年間ほど継続する。初年度は下記の手順例の「手順1」の活動を行い、学生の活動から地域住民の信頼を得ることをボトムラインとする。次年度以降において、地域社会の活性化にむけて行動を起こすときに住民にどのような意識の変化が必要なのか着目しながら手順2、手順3へと展開したいと考えている。

「行動・体験」「経験」時に接する地域資源	
1. 文化資源	(工芸、神社、祭り、芸能、歴史など)
2. 自然資源	(特産物、山、河川、農地、寒暖差、気候、獣害)
3. 人工資源	(施設、道の駅や協働販売所、廃校、道路、自衛隊の存在、営利企業)
4. 社会資源	(公民館活動、人のネットワーク、地域の不文律ルール、地域の階層性：集落、町内会、自治体、行政区、学校区、消防団、民政区域、NPO、社協、子供会、意思決定の立場にある高齢者と地域わかもの葛藤など)

2. ねらい

学生自身による地域の方への直接訪問ヒアリングに加え、地域の方、教員と「同じ釜の飯を囲み考え抜く」ことで批判的思考力の育成につなげる。同時に、地域社会への貢献の双方を強く意識している。後者について、①地域活動の意思決定の立場にある年配者と地域の若者、②同じ集落の人と隣の集落の人、③地域の中高生における世界の中の地域の位置付け、④人と地域アグリ経済、⑤人と獣、⑥人と自然の関係などの視点からどのように地域の社会デザインを行うのかなど地域貢献策を学生と共に議論し、提案したい。

～学生が地域と協働する具体的な手順の「一例」～	
手順1. 地域・団体の実態の把握	(地域資源の探索、課題の設定) 例、「 <u>学生と教員の目から見た地域の豊かさ分析</u> 」 「 <u>地域の豊かさ</u> 」紹介のパンフレット案作成
手順2. 地域住民の主体性を深める	例、住民の「 <u>意見地図</u> 」「 <u>資源写真地図</u> 」
手順3. リーダーの発掘と協働体制づくり	例、住民と大学の「 <u>アイデア地図</u> 」
手順4. 新事業・取組の合意形成と実践	例、 <u>議論展開と実践</u>

3. 対象学年と学部：2～4年生、全学部 (2016年度は、工、経済、教育から合計11(女子2)名の参加)

4. 対象地域とその選定理由

玖珠の八幡自治館組織、この組織に地域コーディネーター的な玖珠町の教育委員がおられ、その方と宿泊型インターンシップにおける学生の教育方針を共有できたため。

5. 実施体制

地域での学生の宿泊には、大学教職員1名が必ず随伴して宿泊する。リスク管理として、大学内の非常時連絡網と、学生と教員間の連絡網と連絡内容を含むリスク対策を事前に指導した。また、学生が怪我など被る場合と、学生が加害者になる場合の双方を想定した保険加入を確認している。現地での学生による住民訪問時では、単独行動ではなく必ず2人以上のチームで、目立つ色の大分大学ジャケットをはおり動くようにした。現地における学生の移動手段は、COC+推進室で新しく購入した自転車である。学生と教職員の宿泊は、八幡地域の元幼稚園(4部屋、炊事可能)の2部屋を男女に分離して使用した。インターンシップの協定書を地域と大学間で取り交わす。

6. 授業過程 (2016年度活動)

1. 11/14 事前指導

この講義が目指す成果とその背景、具体的な実施要領と注意事項、過疎地農業の現状を知るジグソー学習、現場での核となる質問項目の絞り込み、宿泊のオリエンテーションと地域課題の説明

2. 11/19,20 1泊2日 第1回 八幡地区宿泊フィールドワーク

19日 午前中は玖珠役場による玖珠説明、午後は玖珠自治会長宅に訪問し学生による住民訪問ヒアリング

20日 八幡中学校生徒(校長先生)への数学指導、その後、学生による住民訪問ヒアリング、15時~16時15分振り返り

3. 12/17,18 1泊2日 第2回 八幡地区宿泊フィールドワーク 学生による住民訪問ヒアリングと学生と支援者を交えた議論

4. 1/21,22 1泊2日 第3回 八幡地区宿泊フィールドワーク 学生による住民訪問ヒアリングと学生と支援者を交えた議論

5. 2/18-21 3泊4日 第4回 八幡地区宿泊フィールドワーク

パンフレットの1次案の地域関係者への提示と指導、それを踏まえた追加現地ヒアリング調査

6. 2/22-23 大学で1次提案の修正のための調査、議論、最終パンフレット案の作成

7. 2/24-26 2泊3日 第5回 八幡地区宿泊フィールドワーク

2/24,25 熊本県立大学 COC+の地域課題解決に参加している学生グループと指導教員との宿泊型活動内容交流会

(県をまたいだCOC+事業連携教育)

2/26 地域住民の方への最終パンフレット案の説明とその評価 (ここで講義の評価を決定)

8. 3/12 第6回 八幡地区フィールドワーク 八幡地区の文化祭(400人ほどの参加者)での学生による八幡地区活動成果の報告

7. 必要経費

玖珠と大学間の移動：大型バス1回と公用車(7人、8人乗り2台を同時使用)、宿泊施設利用に伴う経費(シーツ購入費、布団レンタル代、光熱水道費など)、学生用自転車(COC+推進室管理)の購入費、さらに、可能であれば地域側コーディネーターへの謝金も欲しい

科目名: 高度化②利益共有型インターンシップ(企業型)

1. 高度化教養科目としての基本的な考え方

○本授業で対象とする観光産業の現状は、「おんせん県おおいた」を中心とした、大分県の資源を生かして、大分県の魅力を味わって大分県内で消費活動をする来訪者や居住者を増加させることが重要である。その取組を推進するために新商品を企画することなどを通じた地域の活性化を進める人材を育成する。

「行動・体験」「経験」する資源	
1. 文化資源	(工芸、神社、祭り、芸能、歴史など)
2. 自然資源	(特産物、山、河川、農地、寒暖差、気温、降雨)
3. 人工資源	(施設、道の駅や協働販売所、廃校、道路、自衛隊の存在、営利企業)
4. 社会資源	(公民館活動、人のネットワーク、地域の不文律ルール、地域の階層性: 集落、町内会、自治体、行政区、学校区、消防団、民政区域、NPO、社協、子供会など)

○テーマを出して頂いた企業には、利益の共有の視点から協働していただくものであり、長期の研修の受け入れとグループワークへの参加、評価活動を行うなど、指導的立場としての参加者となっていただく。そのことによって、それら組織が気付かなかった学生視線の斬新な切り込みによるオリジナル企画に取組ことができることとなる。このことは、そうしたイノベーション人材を育成する協働者としての下記のような機会が生まれることとなる。

2. 授業の概要

○大分県内の中小企業を中心とした「利益共有型インターンシップ」において、学部横断的に構成されたチームが、経営者とともに新規事業を通じて、事前には正解のない問題に対して共同で解答を作り出す手法、能力を養成する演習科目として実施するものである。

～学生が地域と協働する具体的な手順～	
手順1. 地域・企業・団体の実態の把握 (地域資源の探索、課題の設定)	「 学生と教員の目から見た資源写真地図 」
手順2. 地域住民の主体性を深める	住民の「 意見地図 」「 資源写真地図 」
手順3. リーダーの発掘と協働体制づくり	住民と大学の「 アイデア地図 」の
手順4. 新事業・取組の合意形成と実践	議論展開・と実践

○「地域ブランディング」で学んだ事業企画の手法を活用して、企業の関係者と共に、地域のデータや情報などの事実を整理分析し、企業が抱えている課題を指摘し、課題解決の提案と実践をおこなう構成である。

○インターンシップ先として、民間企業では県内の旅行代理店や大手旅行代理店の大分支店を想定している。また、扱う対象により、自治体の観光関連部署をはじめ、不動産業者、医療関係組織などの関連企業・団体とも密接に連携する必要がある

3. 授業のねらい

文理融合的な学生のグループが、大分県の経済がより活性化するように、地域の資源を活かし、大分県内で消費活動をする来訪者や居住者を増加させる商品を企画することを通じて、地域の活性化の実践的役割を果たせる人材を育成する。

そのため、教養教育の座学で学んだ知識に加え、学部教育で学んだ専門的な知識・技能を活用して、実際に地域の課題に対応することで新たな提案と実践を生むことをねらいとする。このことにより、対人関係の中で、異なる他者やその集団の中で自らの知識や考えを説明できるようになることと、他人と考えを協力的にすり合わせることができる、将来の社会人としての基本的な能力をつけることを目標にする。

4. 対象学年：3年生～4年生（全学部）

5. 授業実施体制

(1) テーマ提案者

①(案) JTB大分支店、オーシートラベル、大分航空トラベル(大分航空ターミナル)、DMOジャパンなどの旅行代理店、自治体、医療関係組織、不動産業界等。

② テーマ提案は観光企業等が行うこととし、前年度に協定書を交わして設定する。

(2) 授業担当者：主担当教員、担当教員、テーマ提供担当者

(3) 受講者編成：5名班で活動し、2～3班を1教員が担当する。

6. テーマ設定(年度により変わる) 具体的な内容：以下のテーマ・目的を設定し、そのための観光プランを作成する

テーマ1： 短期間の医療ツーリズムや観光客の増加をめざす

テーマ2： 県外からの移住促進による定住人口の増加をめざす

テーマ3： 数ヶ月滞在する来訪者の増加につながる都市部の大学生の受け入れ

7. 授業過程

(1) インターンシップ先の業務内容の紹介

(2) 既存の大分県内の観光コースや自治体の観光政策についての調査（予備調査）

(3) 大分県内の観光地の成功事例の紹介（講演）

(4) 経済学・経営学分野で、地域活性化等に成功する要因についての検討（講義）

(5) 調査・情報収集をした観光コース・観光政策について、類似の県外の事例との比較も通じた評価（グループワーク）

(6) 学生の視点で、専門分野の思考方法を活かし、旅行者の立場に立って、従来設定されていない旅行コースや、設定されていたとしても新しい組み合わせの企画を検討

(7) 提案内容についてグループ毎の中間報告を実施し、グループ横断的に問題点や有望な点を確認

(8) 提案内容を改善するため、現地調査を実施

(9) グループワークにより提案内容を完成させ、最終報告会を実施

(10) 最終報告会での検討事項も含め、提案内容の今後の可能性について整理

8. 必要経費

県内の事例を講義いただく講師への謝金、学生の移動(インターンシップ先と対象観光地間)のための公用車・マイクロバスの経費など

科目名:高度化②高度化学習ボランティア実践

1. 高度化教養科目としての基本的な考え方

○「高度化学習ボランティア実践」では、計画段階から継続的に関与し、地域豊穡化の企画づくりと実践、さらに振り返りまでプロジェクト全体をひとまとまりのパッケージとして推進し、インターンシップ先の組織と共同で協働して行うことによって、インターンシップの質的向上を図る。あわせて、プロジェクトの進め方や役割の付与と遂行などについてメタ・レベルの学びが行われるよう綿密な指導・支援を行う。

○地域で活動するNPO等(NPO法人または任意団体)あるいは地域組織(まちづくり協議会や公民館運営審議会など)と連携し、その取り組みのフィールドに計画段階から学生を参画させ、課題の析出、取り組み内容と方法の具体化、企画と実際の取り組み、取り組み成果の振り返りまでの一連のプロセスを継続的に体験させる

- 「行動・体験」「経験」する資源
1. **文化資源** (工芸、神社、祭り、芸能、歴史など)
 2. **自然資源** (特産物、山、河川、農地、寒暖差、気温、降雨)
 3. **人工資源** (施設、道の駅や協働販売所、廃校、道路、自衛隊の存在、営利企業)
 4. **社会資源** (公民館活動、人のネットワーク、地域の不文律ルール、地域の階層性: 集落、町内会、自治体、行政区、学校区、消防団、民政区域、NPO、社協、子供会など)

2. 授業の概要

○「学習ボランティア入門」により学習ボランティアとしての活動の意義を学び意欲を醸成した上で、受講させる。上記のような継続的な参画により、地域課題の発見と具体的取り組みの計画、多様な主体間の合意形成、PDCAサイクルの実行、など部分的な参加では学びにくい高度な学習課題について学ばせる。(1 Semester-15回の授業では学びを深めるには不足があり、2 Semester-30回の継続受講を前提として開講する)

～学生が地域と協働する具体的な手順～

- 手順1. **地域・企業・団体の実態の把握** 「**学生と教員の目から見た資源写真地図**」
(**地域資源**の探索、課題の設定)
- 手順2. **地域住民の主体性を深める** 住民の「**意見地図**」「**資源写真地図**」
- 手順3. **リーダーの発掘と協働体制づくり** 住民と大学の「**アイデア地図**」の
- 手順4. **新事業・取組の合意形成と実践** **議論展開・と実践**

＜授業構成＞

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 1～7回 | 取り組みの計画 |
| 8～14回 | 取り組み(前半) |
| 15回 | 取り組みについての中間発表と省察(後半の活動の再検討) |
| 16～22回 | 取り組み(後半) |
| 23～26回 | 成果報告会準備 |
| 27回 | 成果報告会 |
| 28回～30回 | プロセス全体の振り返りとレポートの作成 |

3. 授業のねらい

<育成像C>

養成像AとBに加えて、地域の組織が直面する課題を適切に評価し、学部横断的な多様な考え方を活かし、地域が自律的に活動できるよう地域ビジョンの作成や地域開発に実践的に取り組める人材を育成するために、以下の具体的なねらいや活動を設定する。

<学生へのねらいや活動>

大学の座学で学んだ知識に加えて、それら頭の中に仮置きされた知識を実際に地域の課題に対して用いることで、対人関係の中で将来の社会人としての基本的な能力をつける。具体的には、異なる他者やその集団の中で自らの知識や考えを説明できるようになることと、他人と考えを協力的にすりあわせることができるようになることを目標とする。

4. **対象学年**：学部3年生を原則とし、1テーマ3～4名（「地域ブランディング」の科目履修者）

5. **授業実施体制** テーマ提案については当面、授業担当者が個別の連携先組織と協議し、テーマを設定する。
発展形態としては、テーマの公募が行える実施体制の整備を目指す。

6. **テーマ設定（年度により対象地域が変わる：1テーマ：3～4人）**

番号	テーマを出した組織とその内容	主担当者
1	H29は試行的に1テーマを実施する	岡田正彦

7. 授業過程

1) 事前学習

- ①オリエンテーションテーマの選定・チーム分け
- ②チームビルディング、チームでの取り組み検討
- ③受け入れ先との打ち合わせ

2) インターンシップ①

- ①～④取り組みの課題・方法・内容等についての協議
- ⑤取り組み計画書の作成
- ⑥～⑧先行事例のレビュー
- ⑨～⑫試行的取り組みの実施

3) 中間発表会

- ①取り組み状況の振り返りと中間報告の準備
- ②中間報告会

4) インターンシップ②

- ①～⑤取り組みの本格実施
- ⑦～⑧取り組みの効果に関する情報収集
- ⑨～⑩改善方策の検討

5) 最終発表会

- ①最終報告準備
- ②～③最終報告会

8. **必要経費**：学生・教員・協力先旅費、協力者謝金（場合により委託契約）、消耗品